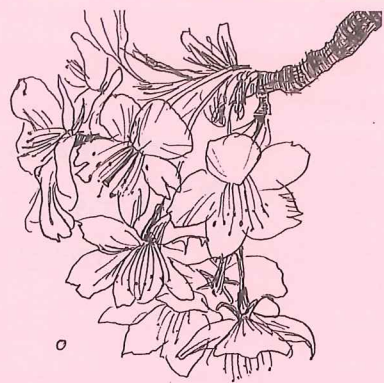


まきばのかぜ



2018年度 園だより 4月号

『Legacy』をどう花ひらかせていくのか

園長 大沢千佳子

卒園していく子どもたちを祝うように美しい花を咲かせた桜。

風に吹かれて花びら雪と散る中、四月を迎えました。そしてあたたかさに誘われるように、園庭の樹々には子どもたちのような若葉が次々と芽吹き、あっという間に無色の世界を春色に染め上げてしまいました。その子らしさが生き生きと息づく毎日を過ごしてくれますようにと、巣立っていったばかりの19人への思いを抱く私たちの傍らで、子どもたちは新しい年の一ページをいとも簡単に開き、朝の白い光を浴びながら遊び、夕暮れの淡く赤い光を受ける頃になると後ろ髪をひかれるように振り返りながら部屋へと消えていく。そんな、『まきば』のいつもの平和な毎日が始まっています。『まきば保育園』は、今年創立6年目を迎えました。歴史を刻むという表現には程遠い時間しか流れていませんが、新たなものを創りだすことの醍醐味と厳しさに対峙してきた五年間だったと思います。

先日、年度初めの職員礼拝が御茶ノ水の本部でありました。奨励者は、その凛とした佇まいと言葉に触れるたびに力を与えられてきた鳥海百合子さん(元日本Y東京Y職員・会員)でした。語られたのは、日本にYWCAの種を蒔き、日本人の職員たちと共に大正デモクラシーそして昭和初期を生きたミスマクドナルドとそのあとを継いだミスカフマンの足跡でした。現在とは違う社会状況の中にあつた時代に、YWCA誕生を牽引し共に歩み、平和な社会を求めて女性たちのため弱き人々のために奮闘されたお二人。子どもの頃、カフマンさんに孫のように可愛がられた鳥海さんは、「役に立つことを探す人であり、不言実行の人であった。稀有の人であった。」とカフマンさんを評され、それを表わすような魅力的なエピソードをいくつも教えてくださいました。信仰を礎に歩まれたお二人の日本での日々、常に人々の話に耳を傾ける謙虚さを持ち、決断においては果敢であり、人とつながる力をもって人々をつなげていらしたとも。そして、最後におっしゃったのは、『21世紀に、先人たちのレガシー(遺産)をどう花開かせていくのか』との命題でした。

1905年に生まれた東京YWCAが100年をこえる時を経て誕生させた『まきば保育園』。立ち上げ期を終え、続く第二ステージへと進んだ私たち。お二人が日本に初めて降り立った時の気概に思いを馳せながら、YWCAの原点を忘れず多くの先人達に続く者として、『まきば保育園』が子どもたちとご家族のためのより良い居場所になっていけるよう、かけがえのない居場所となれるように力を束ねて努力してまいりたいと思います。

今年度もどうぞよろしくお願ひいたします。

